

「SABIHAAモデルでは、郡・村の開発委員会のバックアップを受けながら、1つの村を9つのワード(区)ごとに分けて、WCC(ワード調整委員会)」と呼ばれる住民グループを組織します。彼らが自主的にニーズを見つけて、それが重要なのです」とチーフアドバイザーの寺川幸士・JICA専門家(株式会社三祐コンサルタンツ)。住民たちはWCCごとに、村にどんな資源があるかを地図に記しながら資源管理の計画を立て、活動内容を提案。これに



WCCを組織したら、現状把握のため、各コミュニティにある資源をマッピング。村の課題や具体的な解決方法を話し合っ決めていく

現金収入のきっかけづくりを行っている。こうして初めて、社会的地位の低い人々も含めたすべての住民の参加が実現できるのだ。

寺川専門家自身は、このモデルがネパールに定着して多くの山間部で活用されていく「体制を整えるため、関係機関の橋渡しに注力。「プロ



POWER活動では、現金収入を得る手段の一つとして、女性たちに養蜂の技術を伝えている

関係省庁の職員を対象にした研修では、寺川専門家(右端)はWCCの運営方法やファシリテーション方法などを指導

※ネパール語の「村落振興・森林保全」の略

あるグループでは、土砂崩れで壊れた灌漑水路を復旧することに。プロジェクトからの資金でセメントなどの資材を購入し、作業は住民たち自らが行った

さからの脱却、つまり住民の生活上が不可欠だ。JICAは94(2005年)にネパール西部・中部の丘陵地域で、「村落振興・森林保全計画プロジェクト」を実施。その成果として、森林資源の保護と同時に、住民参加型の村落開発を行う「SABIHAAモデル」を確立した。さらに、このモデルを広範囲に普及させるためには、住民組織や郡・村の開発委員会を統括する地方開発省と、全国の森林を管理する森林土壌保全省との連携を図り、普及体制や職員の能力を強化させることが不可欠。そこでJICAは、09年に「地方行政強化を通じた流域管理向上プロジェクト」を開始した。

住民たちの
自ら行動する力を支援

対して、プロジェクトが資金提供や技術指導を行う。「住民からのニーズはさまざまですが、プロジェクトでは斜面保護、土砂崩れ防止、地方回復などの活動を主な対象としています」。

ある村では、「村の簡易水道の水源が濁っている」という課題が挙がった。調査の結果、濁りの原因は水源付近での土砂崩れであることが分かった。

「土砂が流れ込まないように石組みを作ってはどうか」

住民たちのこの提案に、プロジェクトではセメントなどの資材調達に必要な6万4000ルピー(約8万円)を提供。必要に応じて、各郡に配置されている土壌保

全普及員が技術的なアドバイスも行った。

このように住民自身が課題を見つけ、解決への取り組みを主体的に担っていくのだが、ネパールではカースト制度がまだ根深く残るだけに、住民の中でも特に社会的地位が低い女性や低カースト層へのアプローチも不可欠だ。そこで、女性グループを対象にした「POWER」と呼ばれる活動では、その名の通り、彼女たちの生計を向上させるため、グループで自主的に考えた取り組みに対して一律1万6000ルピー(約2万円)を支援。山あいの地域でも育つシヨウガなどの野菜や果樹栽培、養蜂、ヤギの飼育方法などを指導し、

ジェクトに関係する省庁や出先機関が多く、対象地域も34村落、306ワードと膨大なので、調整や情報共有に苦労します。それでも、SABIHAAモデルを導入し、住民たちが本当に必要としているニーズに合致した支援が続けば、彼らが「自分たちでも動けばなんとかなるんだ」という自信を持つようになります」と語る。

ただ支援を待つだけでなく、自ら動いて、生計を向上させることこそ、貧困の悪循環を断ち切る第一歩となる。これがやがて、彼らの「命綱」である森をこれ以上傷めることなく共生する道につながっていくはずだ。



生活の糧となる森林が
危機にさらされている

世界最高峰を誇るエベレストを有するヒマラヤ山脈を望み、世界中からトレッキングの観光客が訪れるネパール。実に人口の約7割が山間部に暮らす同国では、森林は薪や木材、家畜の飼料とし

て人々の生活に欠かせない。そのためネパールには、森林を保全しながら利用する制度が1980年代からある。薪用に切るのは月に一回、切り出した木材は商業目的に使わない。そう、世界の中でもコミュニティ・フォレストリーに積極的に取り組んできたといっても過言ではないのだ。

ネパール
from NEPAL



森を守るのは
住民の行動力

ヒマラヤ山脈を望むネパールでは、山あいの村々に、いまだ数多くの貧困層が暮らしている。紛争や過疎化などの影響で森林の「質」が低下し、残された人々は森の恵みをうまく生かせず、貧困から抜け出せない悪循環に陥っている。

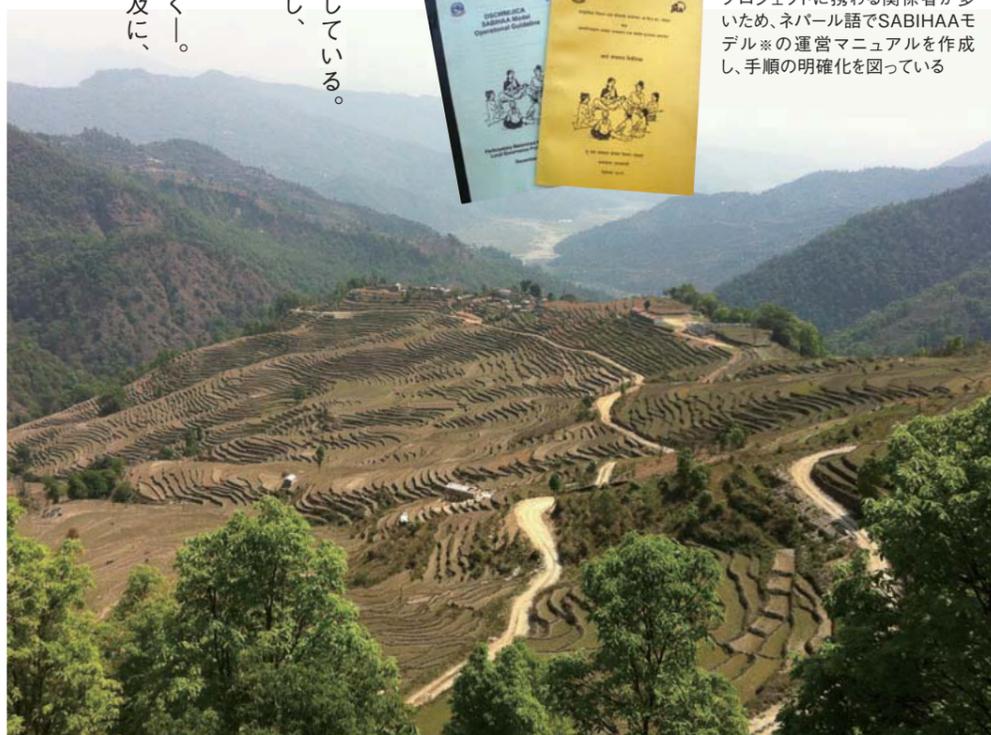
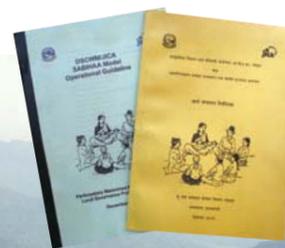
住民が自発的に森を守り、生計向上を図っていく。そんな新たな自然資源管理の仕組みづくりと普及に、JICAが取り組んでいる。

しかし、長期にわたった紛争の影響で、この制度だけでは森を守りきれなくなっている。伐採を禁止されていない枝ばかりがそぎ落とされ、幹だけが残った「電柱」のような木が林立する森が増加。雨が直接大地をうがち、養分を含んだ表土を流出させてしまっている。そもそも多くの村では、出

稼ぎや紛争で過疎化が進み、棚田などの農地の維持管理も難しい。森林減少と農地の生産力低下、土壌浸食により収入源を失った住民が村を離れ、さらなる森の管理不足を招くという悪循環を引き起こしている。

こうした山間部の森林保全を徹底していくためには、まず貧し

プロジェクトに関わる関係者が多いため、ネパール語でSABIHAAモデルの運営マニュアルを作成し、手順の明確化を図っている



ネパール山間部の典型的な景観。山はあっても意外なほどに緑が少なく、雨による表土流出が地力低下に拍車をかける